

日本のアンデルセン 久留島 武彦

『みにくいアヒルの子』や『マッチ売りの少女』などのアンデルセンの作品は、今でも世界中の子どもたちに感動を与えている。日本にも、子どもたちに感動を与え続けた人物がいた。「日本のアンデルセン」と呼ばれた久留島武彦である。

一八七四（明治七）年、久留島武彦は、大分県玖珠町で生まれた。小学校時代は、九歳まで玖珠町で過ごし、その後は中津市で育った。

小学校を卒業すると、武彦は当時大分県に一校しかなかった旧制大分中学校の受験に合格し、大分市で下宿生活をするようになった。そこではアメリカの英語教師のウエンライトと出会い、英語を勉強するのが楽しくなってきた。

ある日、武彦は、ウエンライトに将来の夢について語った。

「これからは、牧畜ぼくちくが重要になってくると思います。将来は牛や馬を育てる仕事をしたいと考えています。だから、外国に行って学ぶためにも、英語をしっかりと勉強します。」
すると、ウエンライトは、

「マイ・ボーイ。君は牛や馬ではなく、人間を育てる人になってください。」
と答えるのであった。何度聞いても、ウエンライトからの答えはいつも同じだった。

※ アンデルセン

デンマークの代表的な童話作家。

代表作品として、『人魚姫』『はだかの王様』『親指姫』などがある。

※ 関西学院

兵庫県西宮市にある大学。

※ 日曜学校

キリスト教教会等が、日曜日に子どもたちを集めて行う教育活動のこと。

※ マイ・ボーイ

親しい友達。
もともとは、母親が息子を呼びかけるときの表現。

その後、関西学院に進み、二十歳になった武彦は、就職先のことを考え始めていた。武彦は、教会の日曜学校で、子どもとふれ合い、将来は子どものためになる仕事をしたいと思うようになっていた。その願いどおり卒業後は、出版社で子ども向けの仕事をするのが決まった。武彦にとって、この上ない喜びであった。

しかし、その喜びは、一通の手紙により消されてしまった。兵隊として働くよう国から命令されたのだ。日清戦争が起きたのである。

自分の願いがかなわず、落ち込んでいた武彦であるが、日本から戦地に向かうとき、

「もしも、時間がとれたら、見たことや聞いたことを書きとめよう。」と、原稿用紙をもっていくことにした。

戦地に入った当初は、原稿を書く時間がとれなかったが、得意の英語を生かして、本部の仕事につくと、少しずつ時間がとれるようになってきた。武彦は、感じたこと、見たことを文章にしていって。自分が書いた文章を、日本にいる子どもたちに読んでもらいたいと思い、

「すまないが、この原稿を出版社に届けてもらえないだろうか。」と、日本に帰る仲間の兵隊にお願いするのだった。

武彦の書いた原稿は、雑誌に載せられ、多くの子どもたちに喜ばれた。



※ 日清戦争
主に朝鮮半島をめぐる日本と清（今の中国のこと）の戦争。

一八九七（明治三十）年、武彦が二十三歳のときに、兵隊の仕事が、ようやく終わった。これから、子どもたちのために活動できると思った武彦だったが、ここからの人生も苦難の連続であった。

武彦は神戸の新聞社で働くことになった。雑誌の原稿料だけでは生活が苦しかったからである。一生懸命働いた武彦だったが、児童文化活動の資金もできず、心の中は満たされなかった。武彦は、その会社を辞めて東京に行くことを決めた。東京なら、自分の願いをかなえられると考えたのである。

東京の出版社に勤め始めたが、なかなか児童文化活動の資金もできず、何度も仕事を変えらるといいう苦しい日々が続いていた。

一九〇三（明治三十六）年、苦しい日々が続く中であつたが、妻のミネの協力もあつて、やつとの思いで、子どもたちに楽しいお話を語り聞かせる「口演童話会」を開催することができた。「口演童話会」は、大成功だった。

喜びもつかの間、翌年、日露戦争が始まり、武彦は再び戦地に向かうことになった。

これでまた、武彦は児童文化活動から、離れなければならなくなったのである。

しかし、戦地においても、武彦は

「子どもたちが、もっと楽しめる活動はどのようなものだろうか。」

子どもが楽しみながら心も育っていくような活動はないだろうか。」

と、いろいろなことを考え続けた。武彦の夢は、ますますふくらんでいった。

「戦争が終わったら、子どもたちのために、口演童話やお芝居も合わせて、もっと大きな活動をやってみたい。きっと成功させるぞ。」



※ 児童文化活動

児童の健全な育成のために
計画・構成された文化活動。

例えば、音楽会、演劇会等。

※ 日露戦争

日本とロシアとの間で発生
した戦争。

戦争が終わり、日本に帰ってきた武彦は、一九〇六（明治三十九）年、口演童話やお芝居、童謡合唱などの文化活動を行う「お伽倶楽部」という団体を設立した。二度の戦争を経験し、転職を繰り返しながらやつと設立した「お伽倶楽部」であった。

武彦が、「お伽倶楽部」の活動の中で、一番力を入れたのは、昔話や童話作品を、子どもたちの目を見ながら、話して聞かせる「口演童話」だった。

「私は、生涯、子どもものひぎの前の友だちでありたい。」この言葉の通り、武彦は、子どもたちの目を見ながら、童話を語ることを通して、多くの子どもたちの心を育てていこうとしたのである。

武彦の「口演童話」を中心にした児童文化活動が五十年も続いたことを記念して、一九五〇（昭和二十五）年、玖珠町に童話碑が建てられた。また、そのときに、第一回の日本童話祭が開催された。

一九六〇（昭和三十五）年、久留島武彦は、子どもたちとともに歩んだ生涯を終えた。八十六年の人生であった。



※ 日本童話祭

久留島武彦の口演童話活動、五十周年を記念して、昭和二十五年に玖珠町で、第一回日本童話祭が開催された。

子ども芸能大会、弁論大会、県内外の童話家による童話大会と様々な行事が行われている。